

## 「違うところがあっても、どうも思わへん」

～ 第13回日本アグーナリーに参加して ～

日本ボーイスカウト滋賀連盟 蒲生第2団 福田沙代子

私が所属するボーイスカウト蒲生第2団は、4年にいちど開催される「国際障がいスカウトキャンプ大会 日本アグーナリー」に参加しています。アグーナリーは、障がいのあるスカウトのためだけの大会ではありません。障がいの有無や老若男女、国籍にかかわらず、参加するすべてのスカウト・指導者がお互いに人格と個性を尊重し支え合い共に生きることを学ぶ場です。今回私は、福島県で8月に開催されました第13回日本アグーナリーに、小学3～5年生のスカウトが在籍するカブ隊を引率し参加しました。

本大会では、参加者は4泊5日で、仲間たちと寝食をともにしながら、さまざまなプログラムに挑戦したり、たくさんの人たちと交流したりします。最初、スカウトたちは「障がいのあるスカウトと一緒にキャンプは難しそう」、「4泊も親と離れたことなんかない…」と参加に及び腰でしたが、過去大会の映像で、いろんなバックグラウンドのスカウトたちが一緒に活動を楽しんでいる様子を見て、カブ隊から9名が参加を決めました。

<「共に生きること」とは？→「違うところがあっても、どうも思わへん」>

アグーナリーのキーワードは、「共に生きる社会」です。私はどうしたらスカウトに「共に生きること」について感じてもらえるか、と頭を悩ませました。その中で、これまで自分は障がいのある人と対峙するときに、「手助けしよう」という意識しか持っていなかったことに気づきました。手助けをするという感覚は、対等でないと無意識に感じているのだろうか、このままではスカウトを導くところではない、と不安がつりました。そこで、子どもたちはどういう感覚なのだろうと思い、中学生の息子に、「運動会とか支援クラスの子も一緒に活動していたけど、どうだった？」と聞いてみました。すると、「違うところがあっても、どうも思わへん。一緒にやるだけ」と返ってきました。インクルーシブ教育が進み、当たり前「一緒にいる」ことがこの発言を生んだのかと感心しました。もしかすると、子どもたちのほうがすんなりと共に生きることを理解できるのかもしれない。

<少しずつ広がっていく交流、深まる理解>

大会前にスカウトに対して、障がいのある人たちと活動することについて、導入をしっかり行い意識してもらう方がいいのか迷い、団委員長に相談しました。「あまり先入観を持たせないほうがいいと思う。実際に感じたものを大切にしたい」と指導いただき、簡単な手話を練習するとどめ大会に臨みました。

大会の序盤では、スカウトたちは、障がいのあるスカウトや国籍の違うスカウトとどう接していいかわからず、あまり交流が進みませんでした。しかし、すれ違う人みんなと笑顔で挨拶を交わしていくうちに、仲間だという意識が生まれ、日がたつにつれ少しずつコミュニケーションをとってみたいと思うようになっていきました。交流は自団から地区、他県、他年齢、スタッフ、外国人スカウトへと、どんどん広がっていきました。

障がいのある方々との交流の機会も随所がありました。大会プログラムの音響会社のブースで、聴覚障がいのある方が、紙コップスピーカーの作り方を指導し、音が出る原理の説明をしてくださいました。そこで

私やスカウトたちは、聴覚障がいのある方が流暢に話をすることに驚き、自分たちの先入観の間違いを強く感じました。また、あるスカウトが、補聴器をつけたスカウトとの交流について、「補聴器をつけている若い人には出会ったことがなかったので話しかけられて少しとまどったけれど、その人はとてもおしゃべりで、話すのが楽しくて盛り上がった。耳が聞こえにくい人は話すのが苦手であり話さないと思っていたけれど、イメージがかなり変わった」と話してくれました。やはり、自分で体験したことによる学びは大きいと感じました。

今回の大会参加で期待以上だったことは、一度交流した海外スカウトと、大会中何度も親交を深めることになったケースが多々あったことです。海外派遣団としてバングラデシュ、香港、マレーシアなどからたくさんの方々が参加していました。最初スカウトたちは「言葉が通じないから、話しかけるのはちょっと無理かも…」としり込みしていましたが、最終日になると、その人たちを見かけたら、スカウトたち自ら声をかけに行ったり、写真を撮ったり、記念品交換をしたりなど、深い交流に発展していきました。お互い母国語ではない英語でコミュニケーションをとりましたが、最後は簡単な日本語を覚えてコミュニケーションをとろうとされるなど、歩み寄りという気持ちにスカウトたちは感激していました。SNS で連絡先を交換したスカウトもいたようです。そして、最後には「また4年後に会おうね！」と再会を約束していました。

#### <大事なものは、理解しあい、お互いに歩み寄ること>

私はこれまで発達障がいのある仲間と組んで研究や仕事をした経験が何度かありますが、独特な感性や一球入魂なところは、仕事を共にするうえで大きな強みだと感じました。お互いの思いを丁寧に伝えるなど歩み寄りが必要でしたが、お互いの得意分野を持ち寄り、より面白いものが作れると、何度も感じました。

しかし私はこれまで、重い障がいのある方に関しては深く付き合う機会がなく、接し方がわからずに避けてきたところがありました。今大会中に、障がいのあるスカウトのために運営している団の指導者と話をする機会がありました。どんな課題や大変さがあるのか、保護者の思い、スカウトを成長させたい気持ちなどについて話しました。自団にも多様なスカウトがおり、「わかる・・・!」「なるほど、これは取り入れたい!」と思うことばかりでした。ほかにも障がいのある方たちと共にアグーナリーの場を楽しんでいるうちに、わからないことを恐れるのではなく、コミュニケーションをとり相手を知っていけばいいだけなのだと思えました。参加する前に私を悩ませた「手助けする」という意識を持つことは、それ自体がだめなのではなく、お互い歩み寄り、必要があれば支えあうことが共に生きるということなのかもしれません。

#### <行うことにより学ぶ>

あるスカウトの感想文に、「今回、障がいのある人たちと接する中で、様々な障がいがあっても困ることが違って、みんな良い子で、自分とあまり変わらないと思った」と書かれていました。若いうちに様々な出会いを経験することは、共に生きる心の育成に大きく寄与すると感じました。道徳で知識として学ぶだけではなく、行うことにより学ぶことに勝るものはありません。

今回の反省点は、私の気づきが遅く手探り状態であったこともあり、すべてのスカウトに積極的な交流を促せたわけではないことです。今後、どうスカウトたちに自然な活動の中で多様性の中にいる自分を感じてもらおうか、これは私の中に大きな課題として残りました。今大会に参加した多くのスカウトが、「また4年後も絶対に行きたい」と言ってくれました。次のアグーナリー参加では、スカウトたちがさらに踏み込んだ経験を、人生を深められるよう、手助けしていきたいです。